

C-7 集団活動に関する研究(Ⅲ) - 幼児期後期の課題とのかかわりについて -
東京家政学院大家政 吉川晴美

目的 幼児期後期にあたる子ども(3~6才)の発達を促進する活動として集団活動は重要な意味をもつ。特にこの時期においては、集団活動のなかで「人との共存、物の共有、自己を促す活動」が展開していくことが重要である。そしてさらに、自己が人や物とのかかわりのなかで内的に充実発展し、自己の外側にある(提起される)課題に近づき、即してかかわること、また相互的な発展をも可能になっていくこと、すなわち自己の内と外との統合的発展(接在性)が可能になっていくことが重要な発達課題であるといえる。このように、幼児期後期の子どもの、自己と課題とのかかわりにおける接在性が、集団活動によりどのように形成されていくかを明らかにする。 * 松村康平「循環的の原況と発達に関する考察」(『子どもの発達』1973)

方法 研究Ⅱ②と同じ

結果 自己と課題との接在性がもたらされた一連の経過の特質(=集団活動の特質と発展の契機(自己に顕在化された課題の特質)が次の様に考察されに。①皆で回る(=関係力動性→転止→内向的課題性)②名前を呼ぶ(=焦点性→連結→人的課題性)③高く飛ぶ(=行為性→空想→共有課題性)④園車に乗る(=連結性→制限→目標課題性)⑤製作する素材を選ぶ(=展示性→役割→共有課題性)⑥製作する場所を決める(=領域命定性→選択→定位課題性)⑦素材を使って製作する(=行為性→軌道→経過課題性)⑧絵本の家に製作した物を貼る(=場面性→焦点化→目標課題性)⑨絵本の家に集まり皆でとびらを削げる(=集団性→合図→共有課題性)⑩絵本の家で製作した物についてひとりごとお話しする(=共存性→役割→内容課題性)など。(接在性への道すじ:①内在→内接→接在②内接→外接→接在③外接→内接→接在)